

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「海外臨床薬学研修に参加して」

研修期間：平成 26 年 2 月 22 日～3 月 9 日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 4 年

100973361

松本千鶴

平成 26 年 2 月 22 日～3 月 9 日の二週間、南カリフォルニア大学 (USC)、またその関連医療施設における海外臨床薬学研修に参加させていただきました。日本と比べ職域が広く社会的地位も高いと言われているアメリカの薬剤師の職務を実際に見ることで日本の薬剤師との違いを知り、その学びをこれから自分が日本で薬剤師として働いていく上で生かしたいと思ったからです。

二週間の全体の流れは、最初の 3 日間は大学内で授業を受けるのが中心であり、その後は 3 組に分かれ大学外のクリニックを訪問したり、大学外の薬局や、USC のキャンパス内にある病院も訪問して見学させていただくなど、医療施設を訪問するのが中心でした。

大学では、Wincor 先生に SOAP や患者カウンセリングの授業を受けました。SOAP は 4 年次の薬物治療学で行った内容とほぼ同じでした。患者カウンセリングでは、カウンセリング全体の流れについてのプリントを用いて学習しました。OSCE 前に学習した時とは違い、患者にこれまでの説明の内容がきちんと理解できているか確認テストをする項目があり、アドヒアランスやコンプライアンスの向上のためにとっても良いと思いました。また、実際に患者役と薬剤師役に分かれてカウンセリングを行うなど、とても良い経験をさせていただきました。

また、実際に USC の学生に交じって実際の学生の講義を受けさせていただきました。てんかんについての授業で、内容や流れは今まで日本で受けてきた授業と変わりませんでした。しかし、日本と違う点として、パソコンを授業に持ち込み、パソコンでスライドを見ながら授業を受けている学生が多くみられたということです。学内を見学した際にも自己学習にパソコンを用いている学生がかなり見られ、また、学内にある自習室にもパソコンが置いてあり、そこには質問に対応する学生がいるなど、学生が勉強しやすい環境づくりが徹底されていたのが印象的でした。

クリニックの訪問では、私は QueensCare と L.A Christian Health Center の二つを訪問させていただきました。QueensCare でお世話になった薬剤師の方は糖尿病の外来患者のカウンセリングを行っていました。診療は基本的に医師が行っているそうですが、患者が薬剤をしっかりと服用できなかつたり、治療で改善できなかった場合、薬剤師がそのようなカウンセリングを行っているそうです。実際に患者対応する場面を見学させていただきました。使っている薬を持ってきてもらい、何に使っている薬なのか患者に確認したり、血中グルコース値をその場で測定したり、それらをふまえて患者にこうするべき、などの指導を薬剤師が全て行っていました。血中グルコース値の測定など、簡単な採血なら薬剤師が行うことが認められているそうです。また、来院しない患者に電話での確認や指導も薬剤師が行っていて、アメリカの薬剤師の職域の広さや信頼を実感しました。訪問した日にローテーションで実習を行っている USC の学生も来ていたのですが、その学生に実際に患者のカウンセリングに参加させたり、患者への質問を考えさせて、実際に電話で患者に質問させるなどして、私はこれから日本で病院・薬局実習を受けるのでその点での日本との違いはまだわかりませんが、学生のうちからそれだけのことをさせてもらえるということはアメリカの薬学生も薬剤師と同じように信頼されているのだと思いました。

L.A Christian Health Center は貧困層の人が患者のメインとなるクリニックで、政府の認定を受けた患者は政府の補助により、安い値段で薬が買うことができますが、もしその基準に外れた人が安く薬を買っていたら、差額は薬局が負担しなければいけないなど、基準は厳しいものになっているそうです。実際に調剤している場面もを見せていただいたのですが、錠剤はすべてボトルで調剤を行っていました。錠剤がシートで管理・調剤できる日本と比べ、調剤のミスは起こりやすそうだと思います。このクリニックでは薬剤師がワルファリンカレンダーをつけていました。カレンダーにはワルファリンの投与日や

その量などが詳しく記載されていて、その他にも患者それぞれの情報も記載されていました。ワルファリン投与が開始したばかりの患者には週に1回来院してもらい、細かくその服用をチェックし、最初の1か月が過ぎると月1での来院になります。来院しない患者には電話で確認するなど、ワルファリンの投薬に関して厳しく管理していたのが印象的でした。

また、USCのキャンパス内にあるKeck Medical CenterとNorris Cancer Centerの二つの大病院を見学させていただきました。Keck Medical Centerではメインの薬剤部とは別に各フロアに薬剤部があり、そのフロアの科によっておいてある薬剤が異なるのが特徴的でした。各フロアの薬剤部には薬剤師とテクニシャンが1名ずつの計2名が常駐しており、テクニシャンが調剤してそれを薬剤師がチェックする、というダブルチェックでのしっかりした管理ができています。薬剤選択については医師、看護師など他の医療従事者を交えたミーティングで決定しているようですが、薬の用量調節は薬剤師が行えるという聞き、それだけこの病院の薬剤師が薬物治療において大きな責任を任されているのだとわかりました。また、患者への治療説明だけでなく、患者が自分の薬剤や薬物治療に疑問がある時、直接患者に薬剤師が説明しに行くなど、薬剤師が中心になっていることが多いと思いました。全体を通して医師や看護師、患者とのつながりがうまくとれているのを感じました。

Norris Cancer Centerはがん専門の病院で、他の病院やクリニックと比べ、患者が過ごしやすくするための工夫がとて感じられたのが印象的でした。がんの治療や入院にかかる費用はとて高いため、薬剤の選択は外来患者か入院患者か、保険はどの程度のものかなどで違いがあるそうです。治療を行っていくなかで、患者の痛みの度合いをフェイススケールで確認するなど、これまで日本の授業でも学んできたことと同じところもありました。患者は、治療を椅子に座りながら受けるのか、ベッドに寝ながら受けるのか、どちらでも選択できるそうですが、ベッドではいかにも病氣、という感じがするため椅子のほうが人気だそうです。他にもテレビを見ながら治療が受けられたり、病院内に服やウィッグを販売するお店があるなど、患者のための設備が整っていると思いました。

薬局はEl Monte PharmacyとSanta Monica Homeopathic Pharmacyの二つを見学しました。El Monte Pharmacyでは800-1000枚/日程度の処方せんを管理していて、とて忙しそうな薬局でした。アメリカでは珍しく、ボトル調剤のほかに機械での一包化調剤も行っている薬局だそうです。また、この薬局に来る人はスペイン語系の他にも中国語系などのアジア系など、英語以外の言語の人が大半であるため、ボトルや一包化でも、それぞれ患者の言語に合わせて説明の記載の文字が変えられているのがとてよかったです。25-30名のスタッフがいるそうですが、そのうち薬剤師は3名で、実質薬剤師として働いているのは2名であり、その点で私は薬の管理や服薬指導が正しく行えているのかどうか疑問を感じました。

Santa Monica Homeopathic Pharmacyはホメオパシーという体の本来持つ自然治癒力をひきだして治療するというを専門とした薬局で、1000以上の薬が置いてある中でも、とて多かったのはハーブを用いた薬剤でした。それも錠剤や液剤など、色々な剤形の薬剤があったのが印象的です。この薬局に来る人はハーブが好きだったり健康志向である人の他にも、薬の副作用がひどかった人や妊婦などの一般的な薬を使えなかったり、ゆるやかな作用を期待した人も多く来局するそうです。日本ではホメオパシーはあまり主流ではなく、また、大学では生薬や漢方についての授業は受けていますが、西洋由来のハーブについては大学でしっかり授業を受けることがないため、聞いたことのない名前のハーブも多く、この薬局での見学はとて新鮮で刺激を受けました。

今回の海外研修を通して知ったのは、医療について、日本・アメリカの双方に優れた点や見習うべき点があるということです。アメリカの薬剤師は職域が広く、テクニシャンという調剤専門の職があることで直接患者と接する職務に多く時間を割くことができ、簡単な採血や予防接種など、薬剤師ができることも多くなっていて、また薬学教育においても日本より臨床的な授業が多く実習期間も長いため、学生のうちから医療機関で学ぶだけでなく、医療スタッフとしても力を発揮でき、それによって薬剤師となってから即戦力としてすぐその力を発揮できるのが、これから見習っていくべき点だと思いました。対して、日本にも優れた点があります。国民皆保険によって全ての人々が等しく医療を受けることができるというのはアメリカにはなく、同じ治療を必要とする患者でも保険の差によって良い薬が使える人とそうでない人の違いがあるのは、アメリカが日本を見習っていくべき点だと思いました。また、調剤の正確さや衛生の面でも日本が優れていると感じました。同じ計数調剤でも、日本はシートで数えやすく、また裏面にわかりやすく薬の名前が記載されているのに対し、アメリカのボトルからボトルへの調剤は薬の選択ミスや薬の数においてミスがおこりやすいのではと思いました。衛生の面では、病院内はアメリカも日本も変わりなく清潔感があったのですが、長い髪の毛を結んでいなかったり、少ないですが爪にネイルをしている人がいたり、医療従事者に対して衛生や清潔さに対して徹底しているのは日本の方がいいと思いました。他にも、スーパーマーケット等薬剤師のいない場所で薬が普通に売られているのに驚きました。長く使っていて信頼性のある薬のみということですが、国民皆保険でないなど、自分で自分の健康を管理するということが根付いているということのあらわれなのかもしれないと思いました。ですが反面、薬剤師や登録販売者の下で全ての薬を管理している日本の方が間違った使い方を防ぐことができるなど、安全の面で良いのではないかと思います。

今回の海外臨床薬学研修で非常に多くのことを学びました。これから5年生になって日本の病院や薬局で実習していく中で、今回学んだことが生かしていければと思っています。お世話になった Wincor 先生やずっと一緒についてくださった学生さん、見学させていただいた医療機関の方々、引率していただいた山口先生には大変お世話になりました。そして、1人だけ4年生だった私を気遣って、いつも支えて下さった5年生の先輩方にも心からお礼申し上げます。

貴重な学習の機会を与えて下さったことに大変感謝します。本当にありがとうございました。